

人が集う開かれた公共空間のデザインと構造についての質的検討 —武雄市図書館が人々の意識変容に及ぼした影響を事例に—

○山崎 茜・前野 隆司（慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科）

Keyword： 図書館、公共空間、場、自己変容、公民連携

【問題・目的・背景】

地方では、少子高齢化や人口流出に基づく人口減少に伴う行政コストの拡大が社会課題となっている[1]。生産年齢人口の減少に伴い自治体の税収は減少し、社会保障費の増大は予算の大部分を占める一方、公共施設の維持費用の捻出が課題となっている[2]。近年では地域住民のつながりの回復、子育て支援、並びに社会的孤立者の居場所づくりなどの場を通じた地域活動の行いが地域活性化の主要な担い手の一つとして現われている。地域の公共の場の一つである図書館においても課題は多い。非正規雇用による司書の低賃金化、司書数の減少[3]が課題であるのみならず、機械化によって図書館に関わる職業は失われる可能性が高い[4]。また、電気書籍やインターネットの普及に伴い図書館の利用者数は減少傾向にある。技術革新を背景に物理的に本や資料を提供する場所として図書館に行く必要性は低下していくなか「場としての図書館」[5]という概念が再燃している。図書館が物理的存在以上に心理的・社会的装置である場合には「場」という言葉を用いた方がふさわしいとも考えられ、武雄市図書館は場としての図書館として現れるべくして現れた[6]とも紹介されている。

本研究では、公民連携が地域活性に寄与した図書館の事例として米国で奇跡と紹介され[7]た武雄市図書館・歴史資料館（以下、武雄市図書館）を取り上げる。本図書館の民営化に基づき、人が足を運び、居心地がよく、長居をする公共空間となったことが、地域にどのような影響を与えるのか、どのような性質があるのかについて、質的調査を用いて明らかにする。場は小規模な場で成立する[8]と考えられがちであるが、本研究では、年間に約 100 万

人が来館する規模の公共施設においても地域の場としての機能、性質が存在し得ることを示す。

【研究方法・研究内容】

本研究では、図書館の指定管理者運営を通じた地域活性の先進事例のひとつである武雄市図書館をケース対象とした。半構造化インタビューを行い、Grounded Theory Approach (GTA) における継続的比較分析法を用いて分析をおこなった。調査対象は、本ケース図書館と関わりがある市民および近隣市町村住民とした。すなわち、職員、民業スタッフ、司書、市民ボランティア、学生等多岐にわたる関係者 10 名から同意を得て調査対象とした。図書館に対し否定的意見をもつ対象者 1 名も 10 名の中に含む。インタビューでは「図書館リニューアル前後の自分自身の変化、図書館の変化、地域の変化」および「地域にとって図書館はどのような存在か」を質問した。

【研究・調査・分析結果】

継続的比較法による質的分析により 199 のカテゴリを抽出し、抽出カテゴリから「個人の自己変容プロセスと地域の関係性」を示すモデルを導いた。個人の自己変容プロセスは大きく 4 つの段階的に変化していた。プロセスは、1) 我事となる状況、2) 自立行動、3) 自立行動の限界と突破、4) 自己の広がり、となっていた。詳細を以下に示す。

1) 我事となる状況

- ・自分でなんとかしなくてはいけない

地域内にいた自分自身が「外にでる」もしくは図書館内に入ってきた「外からの存在」と交わることによって驚き、刺激を受け、自分でやらざるを得ない状況になること等によって、自分自身でやることを選択している。外部に出

表 1 インタビュー対象者

符合	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
カテゴリ	スタッフ	司書	ボランティア	ボランティア	学生	司書	スタッフ	施設関係者	スタッフ	元職員
居住	市外	市外	武雄市	武雄市	武雄市	武雄市	市外	市外	武雄市	武雄市

た人は、外部で地域にはない刺激を受けて触発されている。一方、自分自身が外に行かない人は、図書館内の変化によりこれまで見たことのない人や民間企業から来た積極的な人がいる状況に馴染めない、馴染むことに時間がかかる状況となっていた。図書館内では、職場環境のみならず、利用者層も多様になり、アンチの存在などと対面することによって自分自身の変化を促される状況になっていた。

2) 自立行動

- ・自分で考える
- ・やりたい事をやる

外部に出た者は、環境が変わったことで、自分ではやったことないことを自分で考えてやってみるという行動や、外で得たことを地域内に帰ってきて自分でやってみようとする行動が現れていた。一方、外に出ずに内部で刺激を得た者は、図書館が変化する中で自分なりにその範囲の中でやってみようという行動を行っていた。やりたいことや表現したいという思いは元々持っていたが、以前は決められた事を行う仕事についていたことや、制限、行動範囲の狭さによりできないでいたことが、明らかになった。

- ・未知のものを知る楽しさ

やりたいことをやることに、自分自身で凄さを感じたが、一方で責任を感じるようになっていた。外で刺激を得た者は、外に出る前に地域内で得た情報から刺激され、実際に会いたい、話したいという欲求を持ち、実行をしていた。その際に、実際に会うことで運命を感じる体験を口にしていく。

3) 自立行動の限界と突破

- ・困難を知る

実際に自分が行動する中で難しさに会う経験をしていく。挫折には至っていないが、実際に自分で行うことは困難であったり、環境が整わずできない、いきなりやるとなると抵抗がある、などの状況に直面していた。

- ・良い方向に転がる

その状況を打破したきっかけは、自分だけが頑張るのではなく、周りの助けを得て、前向きに考えた結果として、いい方向に転がっていくという突破の仕方に基づいていた。挑戦を支えるものとして、繋がり、他人を気にしなく

なったこと、仲間がいたこと、図書館が場を提供してくれたことなど、支援が地域に存在していたことが影響していた。

4) 自己の広がり

- ・境界を超える

要因が2つ組み合わせると価値観や活動が広がるという声があった。また、自分と他者が組み合わせり、いつものグループ内ではなく、他グループの個人と個人が2人活動することが広がりにつながっていた。また、自身が2つの活動をしていると地域内での広がりが大きくなるというパターンもあった。どのパターンでも、共通して、元々あった活動境界を越えているという特徴があった。

- ・自分が広がる

難しさや新たな状況、新たなステージを突破するために繋がりを活用したため、自己の広がりが見えていた。

- ・成長・変化を感じる

成長や変化は自分自身のみならず家族などの周囲から変わったこと自体を指摘されていた。

- ・自信につながる

自分自身の活動を他者から見られたことが自信になっていた。人との繋がりや他者からの言葉など他者の意識を認識することが自信に繋がっていた。

以上のように、我事となる状況、自立行動、自立行動の限界と突破、自己の広がりプロセスによって自分自身の成長や変化を感じ、自分の活動を他者から見られることによって自信を得ている点が共通的にみられた。否定的立場の対象者からは変容プロセスは得られなかった。

表 2 自己変容のプロセス

プロセス	カテゴリー	説明
① 我事となる状況	自分でなんとかしないとイケない	生まれ育った地域の外に出て刺激を受けた。外から来た人、今まで見たことない人がすごい。自分でやらないとイケないという使命感
	自分で考える	自分でやった事ないから自分で考えて見よう見まねでやってみた。どうしたらいいか自分で考えてみた
② 自立行動	やりたい事をやる	やりたいことをやりたい、表現したいという思いは元々持っていた。やりたいことができるってすごいと感じた。やりたいことには責任が生じた
	未知のものを知る楽しさ	実際にお会いしたい、お話ししたい。まさかと思う出会いが運命だと感じた。やらなかったことに興味が出た
③ 自立行動の限界と突破	困難を知る	押し付けになってはいけない。人に伝えるのは難しい。人を集めることは難しい。自分のやりたいことだけやってたらあいつ何やってるってなる。仕事は辛いこともある
	いい方向に転がる	繋がりができたらできている。ステージが用意されていた。やっていることは変わらない。いきなりだったら難しかった。他所とは比較しない、気にしない。信頼されていると感じる
④ 自己の広がり	境界を超える	境界を超えた繋がりで化学反応が起きた。仕事の範囲が変わった。人と人の付き合いを楽しむ
	自分が広がる	自分やメンバーが広がっていくイメージ
	成長・変化を感じる	周りから家族から変わったと言われる。この5年が一番成長した。ボランティアが一番変わった。外に行かなくなったら成長しなかった
	自信につながる	見られて自信をもらった。自信になった。人との繋がりをしり、自信になった。働いて自分で返ってくる言葉で成長を実感した

「個人の自己変容プロセス」を支える、地域社会、図書館、外の世界との関係性を図1に示す。

「地域社会」の内部には、「個人」と「図書館」が存在している。「外」の概念はインタビューで導出された言葉である。外の世界の対象は個人の行動範囲によって異なる。自己は基本的に地域社会に属しているが、外の世界に接しているときは、物理的に地域社会から出ている状態を示している。個人の自己変容プロセスの「我事となる状況」の多くは物理的に地域社会から外の世界に出た時に認識をしている。ただし、必ずしも物理的に外に出る必要はなく、地域社会もしくは個人の中に外の世界が交わる場合も同様に「我事になる状況」が見られた。

・図書館の役割

図書館は公共の場であるため地域社会の内部に属しているが、利用者の認識としては、図書館が外の世界との橋渡しをする存在になっていることがわかった。つまり、図書館は物理的には地域社会内部にあるものの、意識や情報の観点からは外の世界にあるのである。図書館の役割は、きっかけを与えたり、場を提供することによって、人々の自己変容を可能としていた。すなわち、図書館が人々に外に出るきっかけや外につながった情報提供をすることが、人々の行動のきっかけを与えていた。それぞれの個人が困難を知った時に、図書館の場の提供やコミュ

ニティの拠点としての存在が間接的に支援する効果を示していた。各人が自分への自信を獲得したのは、図書館という場を通じて外の世界から「見られていた」ことに気づいたことに起因していた。図書館は、寄り添い、見守る存在であると同時に、観客を呼ぶ劇場型空間である。つまり、図書館来訪者の存在によって、地域内部にいる個人は自信を得ることができていた。

・地域社会の役割

地域社会は変容のきっかけを得た個人に対しては困難を支える役割として、図書館同様に自己変容プロセスを可能とする。つまり、地域社会内における繋がり、仲間の存在や信頼されていると感じる自己肯定感が、自己の試行錯誤の支えとなっていた。また、自立行動の限界を乗り越え、良い方向に転がり始める先は地域社会が受け皿となっていることが、インタビューからわかった。自己は利他的な意識を地域に対して向け、地域の役に立つ、周りの人のために動く、自分だけ良ければいいという考えでは周りは動かない、といった考えが芽生えていた。

これらより、自己が試行錯誤しながら変容プロセスを経ることによって自信を得るとともに、地域に対する利他意識が芽生えていたことがわかった。また、地域自体が、図書館を介して「見られる」ことが、地域に対する肯定感を取り戻し、地域全体が変化を受容す

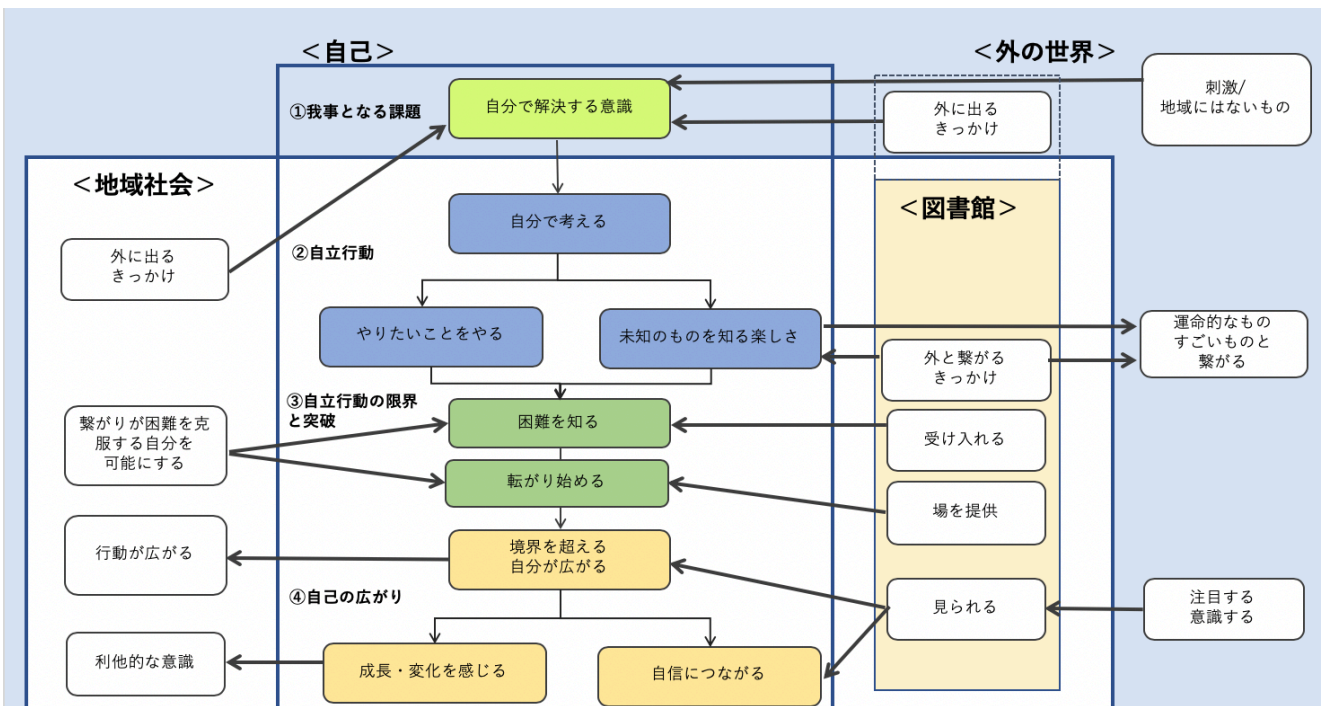


図1 個人の自己変容プロセスと地域と図書館の関係性

る意識を取り戻したことがわかった。

GTA から導かれた、個人の意識変容をもたらした公共空間の特徴をまとめると、以下の6つとなる。(1) 多くの人が集う公共空間、(2) 自由で、選択可能な居場所、(3) 人と人の繋がりのある場、(4) 多様な利用者層、多様なスタッフの混在、(5) 見られる「劇場型空間」による他者意識の存在、(6) 発達上の障害を持つ人にも居心地のよい環境、となっていた。上記の特徴の中でも、地域と自己の変容にとって重要な要素は、外部から人の流入があり、他者から見られる「劇場的空間」となっていることであることを確認した。なお、他者から見られる構造には、3つのケースが存在している。①図書館内部で他の利用者に見られること、②図書館を来訪する観光客や外国人に見られること、③TVや雑誌といったメディアを通して見られること、への意識である。また、住民は、メディアを通して間接的に他の地域からも認知されていることも、意識していた。

【考察・今後の展開】

武雄市の個人は図書館の存在によって自己肯定感を高め成長するとともに、地域への肯定感も高めていた。本研究の事例では、縮小期にある紙メディアを保管する器としての図書館が、人が集う場として変化することにより、場を通じて地域や人にポジティブな影響を与えていた。図書館は全国98%の市区に存在し、約3,000館存在する。図書館がこのまま紙メディアと同様に縮小期に入り行政の負担となるハコモノになる可能性も否定できない。図書館が、本を保持した人が集う“場”として活用されることを選択すれば発展の可能性がひらけるのではないだろうか。その別れ道は、場に他者視点、すなわち、「見られること」を取り入れるか否かにかかっているのではないか。地域活性において、従来型の行政による事業推進を通じたまちづくりのみならず住民主体の地域づくりの重要性が指摘されている[9]現状において、まちづくりに異質な他者視点を与える「よそ者」との協働効果も指摘されている[10]。重要なことは、ウチ・ソトの関係にある両者が対話し協働することである。試行錯誤しながら計画し実行する過程においてその効果は発揮される。本研

究はあくまで対象が武雄市図書館のみであるので、意識変容の対象範囲、継続性、他の地域での再現性、行政の関与の仕方を検討することは今後の課題である。多くの社会課題を抱え、個人も地域も自信を失いかげ、閉塞を感じていたとも考えられる一つの地域の一つで起こったこの変化は、他の地域の未来へも展開可能と考えている。

【引用・参考文献】

- [1] 松浦寿幸, 元橋一之, 2006, 大規模小売店の参入・退出と中心市街地の再生, RIETI Discussion Paper Series.
- [2] インフラ老朽化対策の推進に関する関係省庁連絡会議, 2013, インフラ長寿命化基本計画
- [3] 川村雅則, 2013, 官製ワーキングプア問題(I): 地方自治体で働く非正規公務員の雇用, 労働.
- [4] Carl, Benedikt, Frey and Michael A. Osborne, 2013, THE FUTURE OF EMPLOYMENT” HOW SUSCEPTIBLE ARE JOBS TO COMPUTERISATION
- [5] ジョン E. ブシュマン, グロリア J. レッキー, eds., 2008, 『場としての図書館: 歴史、コミュニティ、文化』(川崎良孝, 久野和子, 村上加代子訳) 日本図書館協会
- [6] 根本彰, 2013, 「場所としての図書館」再考, 現代の図書館 vol. 51 no. 2
- [7] Steve Coffman, ”The CCC/Tsutaya library miracle in Japan: combined bookshop libraries”
- [8] 坂倉杏介, 2013, 「共同行為における自己実現段階モデル」を用いた共創型地域づくり拠点の参加者の意識と行動変化の分析
- [9] 叶好秋, 樂木章子, 杉万俊夫, 2018, 政策の立案・実行過程における住民参加の新しい試み-鳥取県智頭町「百人委員会」-
- [10] 敷田麻実, 2005, よそ者と協働する地域づくりの可能性に関する研究